
プラネタリウム

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラネタリウム

【Nコード】

N3822J

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

それは、僕の父の命日に。

夜のこと。父の十三回忌に、僕はその箱を見つけた。それは押し入れの奥深くにあり、埃を被っていた。

なぜ真新しい高校の制服を汚してまでその箱に手を伸ばしたのか分らない。だけどそれは、物と物の間、僅かな隙間から光り輝いて見えた。

古く錆び付いた、ブリキの箱だ。

少し脂っこく、埃がしっこく張り付くことから、年季が入っているとわかる。煎餅か何かでも入っていたのであろうその箱には、小さな穴が無数に点在していた。

虫などを空き箱で飼うときにこんなことをする。なんとも懐かしさを感じながら僕は、その箱を開けてみることにした。

予想はしていたが、中には何も入っていなかった。その代わりとってはなんだが、底の方になにかこびりついていた。

「なんだろ」

爪の先で削ってみると、簡単に剥がれる。何度か削ってみて、ピンときた。蠟だ。

蓋の裏側を観察すると合点、少し黒ずんでいる。蠟燭を入れて蓋をして、その動作があっているならばこれは。

僕は急いで仏壇から蠟燭とマッチを持ってくると、箱の中に日をつけた蠟燭をたてた。

「やっぱり……」

感嘆する。これはお手製の、プラネタリウムだ。

天井に微かに浮かぶ星くず。それらの名前など僕は知らないが、正確な配置だということは解る。ああ、あれは知っている。北斗七星だ。変だな、星が六つしかない。

田舎で見る夜空よりも星が多い。もしかしたら、人の目には見ることでできない遠い星も刻まれているのだろうか。

僕はその美しさと、丁寧に穿つために使われただろう膨大な時間を思い、再びため息を漏らした。どれほどの情熱をもって、これは作られたのだろう。

「おや……」

背後で床が軋む音と声がして、僕は振り向いた。そこにいたのは祖父だった。

「正一の部屋で何をしてるかと思いきや、随分と懐かしいな」

いまだ海に出る、精悍な漁師の顔。黒々とした皮膚に刻まれた深いシワが、ずっと和らいでいる。

いつも険しい顔をしている祖父の、珍しい笑顔がそこにあった。

「これ何か知ってるの？」

「それは俺のだ。昔作ったやつだが」

驚いた。祖父は星に興味を持っていたのか。

「おじいちゃん、星好きなの？」

僕の一言に祖父は、ゆっくりと腰を下ろした。そして照れ臭そうに、

「それでも昔は、天文学者になりたかったんだよ」

はにかむ祖父に、僕は不思議な感じがした。

今でこそワカメの養殖をしているが、昔は荒れ狂う海に果敢にも出、大漁旗をあげて帰ってくる豪気ところがあったという。そんな祖父と天文学者という言葉は、僕にはまったく結び付かなかった。

そればかりか、祖父という人間がかつて何かになりたいといった夢を持っていたことに実感が湧かなかった。

祖父は祖父であり、祖父は漁師だ。そういう風に完成されたモノなのだ。そう思っていた。けれどそれが、けしてそうとは限らないということに、妙な感覚を覚える。

なんだか、砂糖で作られたサンタクロースが、ホットミルクを不意にかけられて溶かされてしまったような。不思議な感じ。

「なんで天文学者にならなかったの？」

「家は漁師だ、俺は長男だしな」

「お父さんも長男だったでしょ」

問いかけると祖父はそのまま、静かに唇を塞いでしまった。目を細め、僕を見つめながら、だけどどこか遠くを見ている。

祖父を困らせてしまつたろうかと、僕は不安になった。もやもやとする気持ちをなだめたくて、「おじいちゃんこれ、星が足りないよ」と口を開く。

「途中でやめちまつたから」

「ふうん」

また沈黙が降りてきた。

世の中には居心地の良い沈黙と居心地の悪い沈黙がある。これはなんだろう。ちょうど、真ん中だ。

僕はブリキの箱を撫でた。蠟燭のせいでまるで猫のように温かい。きらきら光って、まるで生きている宝箱なそれは、ひどく眩しい。

「お前は親父似かしんねえな」

「えっ？」

不意に祖父が口を開いたもんだから、僕は思わず聞き返した。

「ひいおじいちゃん？」

「正一だよ」

正式名称、木村正一。まがおうことなく僕の父だ。多分。あまり記憶がない。僕が二歳のときに会社帰り事故で死んだ。

「正一がどうしたの」

「あいつも俺の部屋に勝手に入ってよ。そいつで遊んでたもんだから、やったんだ。大学生くらいの時の話だよ」

「ふうん」

父もかつて、押し入れの奥にこれを発掘し、仏壇に走ったのだから。

蝋燭に火をつけて、名前の知らない星くずを見上げて、北斗七星の数を数えたのだろうか。祖父が作りかけた、プラネタリウムを。

「途中だから、北斗六星なんだね」

僕はなんだかおかしくなった。

「六？」

突然、祖父が大きな声を出した。そして天井を見上げ、唇を小さく動かす。

ひとつ、ふたつ、みつつ……。

「こりゃあ驚いた、星が増えてるじゃねえか」

言われて、僕も顔をあげる。そこにあるのは満天の星。人の目には見えない小さな星までも輝く、世界でひとつだけの夜空だ。

「おじいちゃんの作りかけ、お父さんが手を加えていたってこと？」

「ああ……」

祖父は呟くと、ただただ星の足りない夜空を見上げた。喉元が少し震えていた。再びやってきた沈黙のなか、僕は視線を落としてプラネタリウムにまた指を伸ばした。とてもとても、熱くなっていて、今度は触れることが出来なかった。

「おじいちゃん、僕これ貰っていいかな。僕も星を作りたいよ」

祖父は何も言わなかった。だけど答えはなんとなく解った。いつも感じてる、居心地の良い沈黙が教えてくれる。

「僕が完成させるよ」

祖父が作りかけたプラネタリウム、父が作りかけたプラネタリウム、僕のプラネタリウム。

ブリキでできた古い箱はキラキラと、蝋燭が溶けてしまっただけと輝いていた。

(後書き)

2008年製作

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3822j/>

プラネタリウム

2010年10月15日22時55分発行